

令和 6 年 5 月 20 日現在

機関番号：32683

研究種目：基盤研究(B)（一般）

研究期間：2020～2022

課題番号：20H04410

研究課題名（和文）移動・移民による地域像の再構築：ネパールを越えるネパール地域研究の試み

研究課題名（英文）Reconstructing the geographies by movement of people: Nepal area studies beyond national borders of Nepal

研究代表者

森本 泉 (Morimoto, Izumi)

明治学院大学・国際学部・教授

研究者番号：20339576

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 13,100,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、移民送り出し国となったネパールを起点に日本を含む世界各地に展開するネパール人社会を対象に、それぞれの地域での人々の暮らしの実態と、これらの諸地域を繋ぐ移動の連鎖・多元化の過程を明らかにした。前半では、特に在日ネパール人に着目し、暮らしの中で人々が直面している壁について明らかにし、在留資格や年齢、性別等によって特徴的な課題があることを提示した（特集「在日ネパール人の暮らし」）。後半では、移動に至る経緯やその過程を明らかにし、ネパール移民がかたちづくるトランスナショナルな社会の実態を明らかにした（学会パネル報告「ネパールの人々の移住経験 彼/彼女らは何を「選択」しているのか？」）。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、移動・移民に焦点をあてた地理的領域としてのネパールを越えるネパール地域研究を目指すものである。移動・移民に着目した先行研究は古くから蓄積されてきたが、ネパールにとって近年新たな渡航先として加わった日本の事例はまだ蓄積が少なく、本研究で明らかにした日本への移動・移住の諸相から、従来の移動・移民研究に新たな視点や議論を提起することが意義としてあげられる。また、従来ネパールで行われてきた地域研究に、移動・移民を軸にトランスナショナルに広がる動態的なネパール社会の実態を接合することで、本研究は、移動が常態化した今日に相応しい地域研究のあり方を示す実証例になるものと考えている。

研究成果の概要（英文）：This study focused on Nepalese communities which has become an emigrant-sending country and clarified the actual conditions of people's lives in each host societies and the process of chain migration and diversification that connects these various societies. The first half of the study focused on Nepalese people living in Japan, clarifying the difficulties they face in their daily lives and presenting the distinctive challenges they face depending on their status of residence, generation, gender and other factors. The latter half of the study clarified the circumstances and processes that led to migration, and revealed the reality of the transnational society created by Nepalese immigrants.

研究分野：人文地理学

キーワード：ネパール 移動 移住 移民 在日ネパール人 地域研究 トランスナショナル

### 1. 研究開始当初の背景

移動をめぐる問題は、移民の増大に伴い人文・社会科学分野において主要な研究テーマとなり、学際的に多様なアプローチから取り組まれてきた。特に 21 世紀に入ってから、移民が社会に与える影響がますます顕在化するにつれ、移動自体が研究分野として確立された。そして、特定の場所において移動を問うのではなく、「移動から場所を問う」ことが課題として提起されるようになった（伊豫谷編 2007 等）。

本研究で研究対象とするネパールには、移動や移民について長い歴史がある。近年では、ネパールからの移民がグローバルな労働移民の流れに合流するようになり、出身地や移民先に大きな影響を与えるようになった。この傾向が強まるにつれ、ネパールの都市部だけでなく農村部においても、海外との繋がりを無視して現地の人々の暮らしを把握することが困難になってきた。この事態を受けて、ネパールで長年フィールドワークを行ってきたメンバーで、移動・移民から地理的領域としてのネパールを越えるネパール地域研究を目指すことにした。

しかし、本研究が開始された 2020 年 4 月の時点で、新型コロナウイルス感染症 (COVID-19) 感染拡大防止のために全世界的に移動が突然止められ、移民の暮らしに突然甚大な影響が及ぶことが容易に想像された。我々もまた、国外どこか家の外に出ることも憚られるような状況におかれた。予測していなかったこの事態は移動を前提とした社会の脆弱さを露呈させ、移動とは何か、改めて再考させる重要な契機となった。このような非常事態を背景に、研究計画を再検討し、これまで移動が常態化していた移民社会がいかに変容するのか、移動自体がいかに変容するのかを解明し、こうした変化に伴う移民を包摂する社会変容をも研究対象に含めることにした。

### 2. 研究の目的

本研究は、移民送出し国となったネパールを起点に、日本を含む世界各地に展開するネパール人社会においてフィールドワークを実施し、現状を把握するとともに、これらの地域を繋ぐ人々の移動の連鎖・多元化の過程と、直接的間接的に相互連関するネパール人社会の動態を明らかにすることを通じて、ネパール移民がかたちづくるトランスナショナルな社会を複数地点から提示することを目的とする。この作業を通じて、ネパール国内外で暮らすネパール（元）移民を対象とした研究と、ネパールで行われてきたネパール地域研究との再接合を試み、移動が常態化した 21 世紀に相応しい地域研究の一つのあり方を提示することをも目的とした。

日本を含む世界各地に展開するネパール人社会について、ネパール移民の移動過程とその実態をフィールドワークを通じて把握することが必要であったが、COVID-19 感染拡大を受け、当初予定していたフィールドワークを実施できない状態が続いた。このため、先述したように研究目的や研究計画を検討し、COVID-19 の感染拡大の影響を踏まえ、移動・移民の社会がいかに変容したのか、移動自体がいかに変容したのかを解明し、移民を包摂する社会変容を明らかにすることも目的に加えた。そこで、海外への渡航自粛が呼びかけられている間、ネパールを起点とした移動・移住する人々の流れの一つを構成する日本在住のネパール人に着目し、COVID-19 による影響やそれによって顕在化した問題を提示することにした。

以上の作業の最終的な目的は、本研究のメンバーがそれぞれ積み重ねてきた研究を、それぞれ移動という観点から捉え直し、深化させるとともに、他の事例と比較検討することを通じて現代のネパール社会を複数地点から動的に描き出すことにある。

### 3. 研究の方法

本研究課題を遂行するための具体的な作業は、それぞれの研究対象について国内外でのフィールドワークや関連資料の分析と、研究会や協働作業を通じた比較検討である。

研究開始から最初の 2 年間は、とりわけ移動規制を受け困難に直面している在日ネパール人社会の実態を明らかにすることを目的に調査を行った。また、海外渡航が可能になってからは以下に述べるように、これまでそれぞれが進めてきた研究について、「移動・移住・移民」に焦点をあてフィールドワークを行った。

ネパール人の移民先でのフィールドワークは、前述したように COVID-19 による移動規制により当初の計画とは異なる場所や時期、方法で実施することになった。当初はオンラインを利用したり、少し緩和されてからは日本各地でフィールドワークを行った。

海外への移動規制が緩和されてからは、森本泉はネパールの楽師カーストであるガンダルバを対象にカトマンドゥウの他、ラムジュン、ゴルカ、チトワン、ダーディンの村で、佐藤齊華は米国在住のヨルモの人々を対象にニューヨークで、高田峰夫はバングラデシュの大学に留学にするネパール人を対象にカトマンドゥウで、橘健一はチェパンの人々を対象にネパール・チトワンで、田中雅子は日本からネパールに戻った子どもたちを対象に日本各地とカトマンドゥウやポカラ、バグルン等で、名和克郎はチャングル村民を中心とするランを対象にネパール極西部で、藤倉達郎はネパール西部出身者を対象にカトマンドゥウの他、ダン、バルディア、カイラリで、藤倉康子はパディの人々を対象に西ネパール及びインド・ムンバイで、南真木人はインド・ネパール料理店を対象に日本各地と、海外移住労働経験のあるマガールの人々を対象にネパール・ナワルプル

で、Tina Shrestha はネパール人留学生を対象に日本各地で、Dipesh Kharel は在日ネパール人を対象に日本各地及びネパール各地でそれぞれフィールドワークを行った。

各自で進めてきた調査研究について、研究会で報告し、意見交換を行った。4年間で研究会を計10回と勉強会を1回開催した(第1回2020年4月29日、第2回2021年2月22日、第3回2021年8月3日、第4回2021年12月4日、第5回2022年4月3日、第6回2022年7月10日、第7回2022年12月25日、第8回2023年3月29日、第9回2023年12月3日、第10回2024年3月2、3日、及び南アジア学会でのパネル報告のための勉強会2023年8月23日)。第1回から第5回まで、及び第8回はオンラインで研究会を開催した。第6回研究会では、渡日していた英国 University of Edinburgh でネパール移民の研究をしている Jeevan Sharma 氏に講演(題目 Suffering of Nepali Migrants: some thoughts on precarity)をして頂き、本科研メンバーに加え国内外の研究者・関係者も参加し、幅広い議論を交わすことができた。

#### 4. 研究成果

本研究から得られた成果を以下におおまかに報告する。

##### (1) 在日ネパール人を対象としたアンケート調査

コロナ禍で在日ネパール人が困難な状況におかれていたことから、在日ネパール人の登録者数100人以上の194の自治体を対象に、在日ネパール人に必要な情報をいかに伝えているのか、アンケート調査を実施したところ、63の自治体から回答を得られた。調査結果から、回答のあった半数以上の自治体が必要な情報をネパール語で発信していないこと、そのかわりに媒体として自動翻訳機能の利用が可能な Web サイトを利用していること、またネパール人住民への支援として日本語教室、生活相談、生活困窮・就労支援、在留資格相談等を行っていることが明らかにされた。コロナ禍のような災害時には、とりわけ在日ネパール人への情報伝達が課題として指摘され、情報チャネルとして地域で暮らすキーパーソンの役割を担うネパール人の存在が重要であることが明らかにされた。

##### (2) 「在日ネパール人の暮らし」に関する特集

2020年度から2021年度にかけて在日ネパール人を対象にその実態について調査を行い、その結果を研究会で検討し、雑誌『地理』(67-3号 2022年2月発行)において特集「在日ネパール人の暮らし」を報告した。この企画は、地理教育関係者を読者層とする月刊誌『地理』を媒体とすることで、在日ネパール人の暮らしを広く日本社会に、特に若い世代に周知することを目指した。この特集で報告した論考は次のとおりである。「在日ネパール人とは、どのような人々か? 身近なところから国際理解を試みよう」(森本泉)、「在日ネパール人の子供の将来 在留資格による進路選択の壁」(田中雅子)、「ネパールからきた子どもたちの学校教育と日本の地域社会」(藤倉康子)、「エヴェレスト・インターナショナル・スクール・ジャパン 在日ネパール人がつくるネパール・日本・世界を結ぶ拠点」(佐藤齊華)、「ネパール人留学生の進学希望と就労 日本で暮らす選択: 留学から就職へ」(ティナ・シュレスタ)、「ネパールの山村から日本へ ライフヒストリーからの接近」(藤倉達郎)、「ネパール語を翻訳するのは誰か? 日本とネパールのあいだの翻訳空間」(橋健一)。

以上で描かれた在日ネパール人の暮らしを通じて、在日ネパール人といっても多様であることと、その多様性の一因となっている在留資格により日本で暮らす際に直面する壁が異なること、様々な壁が存在すること、こうした壁に対する在日ネパール人の苦労や工夫等が示された。

##### (3) パネル報告「ネパールの人々の移住経験 彼/彼女らは何を「選択」しているのか?」

2022年度から徐々に海外渡航が可能になったことを受け、国内外でフィールドワークを行い、2023年度は南アジア学会においてパネル報告「ネパールの人々の移住経験 彼/彼女らは何を「選択」しているのか?」を実施した。移動・移住が身近で重要な選択肢となった現代ネパール社会において、人々は何のために、いかに移動・移住し、その過程で何を「選択」しているのだろうか。また、移動・移住の経験の中でいかなる社会を構築、再構築しているのだろうか。4人の報告者はこれらの問いを共有し、ネパールの人々の移動・移住の経験を、世界各地の複数地点において提示することを目指した。このパネルで報告された事例は次のとおりである。「ガンダルバの移動実践の変容: 何が人々を動かしてきたのか?」(森本泉)、「ジェンダー化された移動の経験: ムンバイーにおける女性の稼ぎをめぐる葛藤」(藤倉康子)、「Infrastructural Casualties: Education Intermediaries and Casualization of Nepali Student Workforce in Japan」(Tina Shrestha)、「ネパール移民にとっての母国語教育: 日本からネパールに戻った子どもたちへの聞き取りから」(田中雅子)、「ネパール脱出: 海外移住「選択」の裏側、ある民族的マイノリティのケース」(佐藤齊華)。これらの報告から、ネパールを起点に隣国インド、日本、そして日本から戻った子どもたちが暮らすネパール各地、そして米国ニューヨークと、複数地点から暫定的だがトランスナショナルなネパール社会の在り様が提示された。

##### (4) ネパールを越えるネパール地域研究

これまでの研究成果の集大成として論文集を刊行する予定である。それぞれの研究題目は次のとおりである。Nepali Women Migration to Japan: Unveiling the Challenges and Opportunities for Nepali Village Women in the Japanese Labor Market (Dipesh Kharel)、「Fear of being left behind»: education aspirations and youth im/mobility in Kathmandu (Tina Shrestha)、「ネパール脱出: 海外移住「選択」の裏側、ある民族的マイノリティのケー

ス」(佐藤齊華)、「ネパール移民にとっての母国語教育 日本とネパールを往来する子どもたちへの聞き取りから」(田中雅子)、「チャングル村民の移動の変遷と故地をめぐって 季節移動から欧米移住まで(仮)」(名和克郎)、「医学教育を求め「南」へ バングラデシュのネパール人留学生とその背景」(高田峰夫)、「ムンバイの片隅で：ジェンダー化された移動の経験」(藤倉康子)、「ガンダルバの移動実践とその変容：門付けから海外出稼ぎへ(仮)」(森本泉)、「移動できない先住民チェパンの移動(仮)」(橘健一)、「海外労働のさまざまな意味 ネパール西部出身者たちのライフヒストリーから(仮)」(藤倉達郎)、「過疎化する山村 中部ネパールのマガールにおける海外移住労働の帰結(仮)」(南真木人)。

これらの論考において、移動を前提とした人々の暮らしを描き出し、その経験の変容やそれに伴う移動の意味の変化を提示する。この作業は、前近代的な移動から今日のグローバルな労働移民、留学をきっかけとした移動・移住、そしてまた移動への欲求、移動せざるを得ない/移動できない困難を背景に、ネパールの人々がかたちづくるトランスナショナルな社会を複数地点から提示することになる。このような移動から場所を問う作業は、ネパールを起点としたトランスナショナルな社会を問うことにもなり、移動が常態化した 21 世紀に相応しい地域研究のあり方を提起することになると考える。

#### 参考文献

伊豫谷登士翁編 2007. 『移動から場所を問う 現代移民研究の課題』有信堂

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計12件（うち査読付論文 5件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 NAWA, Katsuo	4. 巻 54(3)
2. 論文標題 Coping with Discourses on Minority Populations among the Rang of Far Western Nepal: Nation, Scheduled Tribe, Janajati, and Indigeneity	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 International Quarterly for Asian Studies	6. 最初と最後の頁 237-257
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.11588/iqas.2023.3.20369	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -
1. 著者名 Sato, Seika	4. 巻 28(1)
2. 論文標題 Women Read Scriptures: Changing Religious Practice in Hyolmo, before and after the 2015 Earthquake	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 Studies in Nepali Society and History	6. 最初と最後の頁 73-102
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 佐藤育華	4. 巻 37
2. 論文標題 ネパール脱出：アメリカ移住という『選択』、ある民族的マイノリティのケース	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 帝京社会学	6. 最初と最後の頁 87-106
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 Tatsuro Fujikura	4. 巻 28(1)
2. 論文標題 Terms of Inclusion: Notes on Tharu Indigenous Activism since 2015	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 Studies in Nepali History and Society	6. 最初と最後の頁 173-221
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Tatsuro Fujikura	4. 巻 28(1)
2. 論文標題 Introduction: Studies on the Dynamics of Socio-cultural Change after the 2015	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 Studies in Nepali History and Society	6. 最初と最後の頁 69-72
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Tatsuro Fujikura	4. 巻 18
2. 論文標題 Pascim Nepalma Bandhuwa krsi majdurko mukti andolan	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 Samaj Adhyayan	6. 最初と最後の頁 55-96
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Tatsuro Fujikura	4. 巻 64
2. 論文標題 Comment on Sara Shneiderman et.al., House, Household, and Home: Revisiting Anthropological and Policy Frameworks through Postearthquake Reconstruction Experiences in Nepal	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 Current Anthropology	6. 最初と最後の頁 517-518
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1086/727369	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 NAWA, Katsuo	4. 巻 27(1)
2. 論文標題 Beyond Critical Analyses of the Aftermath of the 2015 Nepal Earthquakes	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 Studies in Nepali History and Society	6. 最初と最後の頁 213-224
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 田中雅子、ディベシュ・カレル	4. 巻 13
2. 論文標題 深まる親子の溝 在日ネパール人コックの出身地に「残された子ども」	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 移民政策研究	6. 最初と最後の頁 27-45
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 森本泉	4. 巻 61
2. 論文標題 ネパール人から見た留学先としての日本 - 非英語圏の大学における英語プログラムの可能性	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 お茶の水地理	6. 最初と最後の頁 40-45
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 森本泉	4. 巻 44
2. 論文標題 『不要不急』の移動を再考する COVID-19と観光とクルーズ	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 PRIME	6. 最初と最後の頁 3-18
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 TANAKA, Masako	4. 巻 18
2. 論文標題 Limitations of Social Protections of Migrant Families in Japan Exposed by COVID-19: The Case of Nepalese Women	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Asia-Pacific Journal Japan Focus	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計21件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 8件）

1. 発表者名 Nawa, Katsuo
2. 発表標題 On Multilayeredness of Knowledge and Practice in the Rituals of the Byans, Nepal
3. 学会等名 International Workshop: Shaping Asia through Knowledge Circuits (国際学会)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 森本泉
2. 発表標題 ガンダルバの移動実践の変容：何が人々を動かしてきたのか？ パネル報告「ネパールの人々の移住経験 彼/彼女らは何を「選択」しているのか？」
3. 学会等名 日本南アジア学会第36回全国大会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 藤倉康子
2. 発表標題 ジェンダー化された移動の経験：ムンバイーにおける女性の稼ぎをめぐる葛藤 パネル報告「ネパールの人々の移住経験 彼/彼女らは何を「選択」しているのか？」
3. 学会等名 日本南アジア学会第36回全国大会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 Tina Shrestha
2. 発表標題 Infrastructural Casualties: Education Intermediaries and Casualization of Nepali Student Workforce in Japan パネル報告「ネパールの人々の移住経験 彼/彼女らは何を「選択」しているのか？」
3. 学会等名 日本南アジア学会第36回全国大会
4. 発表年 2023年



1. 発表者名 田中雅子
2. 発表標題 ネパール移民にとっての母国語教育：日本からネパールに戻った子どもたちへの聞き取りから パネル報告「ネパールの人々の移住経験 彼/彼女らは何を「選択」しているのか？」
3. 学会等名 日本南アジア学会第36回全国大会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 佐藤育華
2. 発表標題 ネパール脱出：海外移住「選択」の裏側、ある民族的マイノリティのケース パネル報告「ネパールの人々の移住経験 彼/彼女らは何を「選択」しているのか？」
3. 学会等名 日本南アジア学会第36回全国大会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 田中雅子
2. 発表標題 往來する外国ルーツの子どもの母語・継承語教育：在日ネパール人が運営する母国語教室の事例から
3. 学会等名 国際開発学会第24回春季大会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 橘健一
2. 発表標題 先住民チェパンの生業の歴史とクスンダ
3. 学会等名 国立民族学博物館共同研究「アジアの狩猟採集民の移動と生業 多様な環境適応の人類史」
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 Tatsuro Fujikura
2. 発表標題 Crafting Indigenous Futures through 'Traditional Democracy: ' Tharu Activism in Contemporary Western Nepal
3. 学会等名 Himalayan Studies Conference, University of Toronto (国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Tatsuro Fujikura
2. 発表標題 Crafting Constitutional Structure from Below: Federalism, Bureaucracy and the Tharu Self-Governance in Nepal
3. 学会等名 Annual Conference on South Asia (国際学会)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 Tatsuro Fujikura
2. 発表標題 On the Importance of Long-term Fieldwork
3. 学会等名 Central Department of Anthropology, Tribhuvan University, Nepal (国際学会)
4. 発表年 2024年

1. 発表者名 Tatsuro Fujikura
2. 発表標題 Notes on Nepal and Himalayan Area Studies in Japan
3. 学会等名 Martin Chautari, Kathmandu, Nepal (国際学会)
4. 発表年 2024年

1. 発表者名 藤倉達郎
2. 発表標題 社会的共通資本と地方自治－ネパールの事例をもとに－
3. 学会等名 京都大学人と社会の未来研究院社会的共通資本と未来寄附研究部門フォーラム 「進化する社会的共通資本」
4. 発表年 2024年

1. 発表者名 田中雅子 (デュヌ・バズラチャルヤと共同発表)
2. 発表標題 親の移住が「残された子ども」に与える影響：ネパールの事例
3. 学会等名 国際開発学会第32回全国大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 TANAKA, Masako
2. 発表標題 The career choices of Nepalese migrants' children in Japan
3. 学会等名 Himalayan Studies Conference Toronto 2022
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 森本泉
2. 発表標題 モビリティ向上手段としての留学 - ネパール人留学生を事例に
3. 学会等名 日本地理学会春季学術大会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 MORIMOTO, Izumi
2. 発表標題 Transforming and dispersing sarangi; From avatar of the Gandharba to opportunity to change society
3. 学会等名 Nepal and the Himalaya Studies Annual Conference (国際学会)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 NAWA, Katsuo
2. 発表標題 Multilayeredness of journeying experience and its transformation among Rang from Byans, Far Western Nepal
3. 学会等名 Himalayan Journeys: Circulations and Transformations (国際学会)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 田中雅子
2. 発表標題 稼ぎ手としての「家族滞在」者ーコロナ禍の在日ネパール人に見る支援制度の課題
3. 学会等名 移民政策学会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 森本泉
2. 発表標題 在留ネパール人の傾向と特徴 留学生をめぐる問題
3. 学会等名 日本学術会議 多文化共生社会分科会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 FUJIKURA, Tatsuro
2. 発表標題 The Transition and Pluralization of Democracy: Through the Case of Federalization and Constructions of Local Self-governance in Nepal
3. 学会等名 Symposium on Great Transition in India: Past and Present (国際学会)
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計10件

1. 著者名 横山 智、湖中 真哉、由井 義通、綾部 真雄、森本 泉、三尾 裕子編著	4. 発行年 2023年
2. 出版社 古今書院	5. 総ページ数 138
3. 書名 フィールドから地球を学ぶ 地理授業のための60のエピソード	

1. 著者名 デヴィッド・グレーバー / 藤倉達郎 訳	4. 発行年 2022年
2. 出版社 以文社	5. 総ページ数 592
3. 書名 価値論 人類学からの総合的視座の構築	

1. 著者名 田中雅一、石井美保、山本達也編 (藤倉達郎)	4. 発行年 2021年
2. 出版社 春風社	5. 総ページ数 456
3. 書名 インドー剥き出しの世界	

1. 著者名 横山智、湖中真哉、由井義通、綾部真雄、森本泉、三尾裕子編著（森本泉）	4. 発行年 2023年
2. 出版社 古今書院	5. 総ページ数 136
3. 書名 フィールドから地球を学ぶ 地理授業のための60のエピソード	

1. 著者名 日本ネパール協会編（森本泉・橘健一・田中雅子・藤倉達郎）	4. 発行年 2020年
2. 出版社 明石書店	5. 総ページ数 404
3. 書名 現代ネパールを知るための60章	

1. 著者名 MIO, Minoru, NAKAMIZO, Kazuya, and FUJIKURA, Tatsuro (FUJIKURA, Tatsuro)	4. 発行年 2020年
2. 出版社 Routledge	5. 総ページ数 216
3. 書名 The Dynamics of Conflict and Peace in Contemporary South Asia: The State, Democracy and Social Movements	

1. 著者名 駒井 洋 監修 小林 真生 編著（田中雅子）	4. 発行年 2020年
2. 出版社 明石書店	5. 総ページ数 206
3. 書名 変容する移民コミュニティ 時間・空間・階層	

1. 著者名 鈴木 江理子 編著 (田中雅子)	4. 発行年 2021年
2. 出版社 明石書店	5. 総ページ数 309
3. 書名 アンダーコロナの移民たち：日本社会の脆弱性があらわれた場所	

1. 著者名 田中雅一・嶺崎寛子編 (藤倉康子)	4. 発行年 2021年
2. 出版社 昭和堂	5. 総ページ数 472
3. 書名 ジェンダー暴力の文化人類学—家族・国家・ディアスポラ社会	

1. 著者名 ビゼイ・ゲワリ著 田中雅子監訳・編著 (田中雅子)	4. 発行年 2022年
2. 出版社 上智大学出版	5. 総ページ数 192
3. 書名 厨房で見る夢 在日ネパール人コックと家族の悲哀と希望	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	田中 雅子  (Tanaka Masako)  (00591843)	上智大学・総合グローバル学部・教授   (32621)	
研究分担者	佐藤 斉華  (Sato Seika)  (10349300)	帝京大学・文学部・教授   (32643)	

## 6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	SHRESTHA TINA  (Shrestha Tina)  (10832470)	早稲田大学・高等研究所・講師（任期待）    (32689)	
研究分担者	藤倉 康子  (Fujikura Yasuko)  (20773782)	京都大学・東南アジア地域研究研究所・連携研究員    (14301)	
研究分担者	名和 克郎  (Nawa Katsuo)  (30323637)	東京大学・大学院情報学環・学際情報学府・教授    (12601)	
研究分担者	橘 健一  (Tachibana Kenichi)  (30401425)	立命館大学・政策科学部・非常勤講師    (34315)	
研究分担者	南 真木人  (Minami Makito)  (40239314)	国立民族学博物館・超域フィールド科学研究部・教授    (64401)	
研究分担者	KHAREL DIPESH  (Kharel Dipesh)  (50785102)	東京大学・大学院情報学環・学際情報学府・客員研究員    (12601)	
研究分担者	高田 峰夫  (Takada Mineo)  (80258277)	広島修道大学・人文学部・教授    (35404)	
研究分担者	藤倉 達郎  (Fujikura Tatsuro)  (80419449)	京都大学・アジア・アフリカ地域研究研究科・教授    (14301)	



7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------